入居者インタビュー

今回お話しを伺った菱田茂子さん

今回は入居して二年になる菱田茂子さん（79歳）をご紹介します

「主人が亡くなり、子供もいない。『このまま一人で最後は孤独死？』と哀しい気持ちになったのが、入居を考え始めたきっかけ。老後をもっと有意義に過ごしたい・・という思いがだんだん大きくなりました。ゆうゆうの里は、長年住み慣れた我が家から近く、私の一番の条件だった経営基盤の安定や、評判が良かった。それに拘束されない自由な生活ができる。いざという時は頼れる。どれも魅力でしたね。」と話す菱田さん。

59歳で中学校の教師を退職した後中国の日本語教師として再び教壇に

菱田さんは公立中学校の教壇に立ち59歳で退職されました。その後、菱田さんには中国に行きたいという夢がありました。「漢字を始め、しきたり、暦の読み方、お祭りごとなどたくさんの文化が、中国から日本へ入ってきています。私は、その古い歴史に触れたいと思ったの。」そのために五年間、中国語を習い、日本語の派遣教師として、再び、天津理工学院と上海大学の教壇に立つことになりました。

その頃の様子を伺うと「色々な国の人が集り、お互いの自国の話しをして盛り上がり、異国情緒満点。毎日が賑やかで楽しかった。その頃の経験は、見識を深める意味では、少し役に立っているかな」と懐かしそうに話してくださいます。

徳利？実は花瓶　大学からもらった思い出の品

自分の詩が歌になるなんて。詩を書いていると時の経つのを忘れます

「ある日、夜空の瞬く星を見ていたら、母が『元気でいるか？』『幸せか？』と話しかけているように思え、その時自然に浮かんだ言葉を詩にしたんです。もともと詩を書くのが好きだったので、読売新聞の【本格的に作詞を勉強したい方募集】の記事を見つけた時、すぐにその詩を応募しました。」

その詩が承認され、現在、菱田さんは日本音楽著作権協会・日本作詞家連盟の会員に所属し、作詞活動をされています。

「詞を本気で書き始めたら、あっという間に時間がたってしまいます。何か心配事や悩み事があると詞も浮かんできません。でも、里に入居してからは、時間に縛られることもなく、先の不安がないので、いい詞が書けそうな気がします。レコーディングや作曲家との打ち合わせで京都に行くことが多いので、里から京阪電車一本で行けるのも便利です。私は、いつも、京都での昼食は出町柳でお好み焼きと決めています。そこのマスターがカラオケ好きで話が盛り上がり、ほんと楽しいですよ。」

菱田さんが、行きつけのお店は里の近隣にもたくさんあります。ある日「隣の喫茶店に行ったら休みで、京都までお昼ご飯を食べに行って来たの！」と。

菱田さんの行動力には驚かされます。

いつか人の心を揺さぶるような詩を書きたい

今まで、菱田さんの詞は10曲CD化されうち4曲はカラオケ配信されています。演歌は、ワンコーラスの中に、情景2行心情2行、まとめ2行の詞で成り立ち、とりわけ心情の部分が一番大切かつ、一番難しいそうです。

「いつか人の心を揺さぶるような詞を書きたい！」菱田さんは笑顔で、語ってくださいます。これからも里での安心した生活のもと自己実現に向かって頑張ってください。

菱田さんが作詞された作品の数々